ばんぎす!暴食もんすたー!

Yamateras

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イビルジョー！

暴飲暴食の暴れる竜！

やつにルールなんてない！

好きなだけ食うが良い！

そんな食べ放題野郎が新たな食を求めていくお話です。

感想頂けたら投稿頻度増えます（恐らく）

目次

渓流の生態系の頂点、闊歩す！ ―― 1
究極！恐暴竜に食事を提供せよ！ ―― 4
恐暴竜の生態を確認せよ！ ―― 7
行くぞ孤島！孤独な島！ ―― 10
かっさらえ！食材たちを！ ―― 13
帰還、孤独に。 ―― 18
さよなら？ ―― 21
さよなら？ ―― 25

渓流の生態系の頂点、闊歩す！

―音が聞こえる
木々が揺らめき、葉を擦る音。
川のせせらぎが石を揺らす音。
小さな生物たちが鳴いている音。
そして…

「んっ… ぁむ…」
何かを貪る物の咀嚼音。
骨が砕ける音。
軟骨がくぎゅりと割れる音。
肉がミチミチと裂けていく音。
「… ふぅ、満足満足… ♪」
1人の少女の声が響く。
その髪は深い緑に染められ、服装はまるで軍隊の厳しい女教官のような格好をしている。
そして、手や口周りは真っ赤に濡れていた。
「食事も終わった事だし、川で身体を… スッキリさせよう…」
そして彼女は川の中で座り、足を伸ばして背中を水につけた。
「んっ… ぅ… 冷た…」
水に入れば、手に着いた血液が流れていく、その手で水を掬い口元を流す。
「さぁて… お腹に余裕が出来たし… 移動しようかな… ？」
太陽の光を手で隠しながら、空を浮く観測船を見据える。
「ハンターさん達の村に… 何を食べているんだろ… ？」

―Ｉｎ　ユクモ村
「…」
目の前に出されるのはきっちり調理され、整えられた焼き魚やらの

食事。
無論、不味い訳ではない。
しかしこのハンターはこういう食事を求めているのでは無い。
「もっとこう…　自然を感じたァい！」
このハンター、何故かアウトドアな料理がたまらなく食べたいのである。
「はぁ…　大自然の食事を味わいたい…」
そう言って、手元の採集クエストの依頼書を死んだ目で見つめている。
「食うか…　自然…　！」

―Ｉｎ　ユクモ村から少し出た所くらい
「はぁ…」
「なーんも考えてないや」

「「…」」

「「…　へ…　？」」

全てが重なる。

「ぁッ、先どうぞ…　？」
最初にハンターが譲りに入る。
「え、ぁ、どうも…　人ｇ…　じゃなくて、この当たりで食べられている食べ物が気になって来たんです…」
「この当たりの食べ物…　ですか、特にこれと言ったものは…」
「何でもいいです！食べてみたいんです…　！」
強引に迫る恐暴竜。
「は、はぁ…　もし良ければ食べていきます…　？うちの村の食べ物…」
「いいんですか？やったぁ！」

「…」
ハンターは悩んでいた。
この娘は何者だ…？
何ゆえこんな所でご飯乞食してるんだ…？
そして何より…

どうしてこの娘はバンギス装備なんか着てるんだ…？

バンギス装備と言えば、あの恐暴竜素材をあしらった装備である。
古龍には及ばぬとも劣らないその討伐難度は様々なハンターの中でも共通して言える事である。
なのにどうしてこんな娘が…？
視線を向けると彼女は首を傾げて、
「早く連れてってよぅ！」
と笑顔を私に向けてくる。

「… どうしたものか」

と、苦笑いを零すことしか出来なかった。

究極！恐暴竜に食事を提供せよ！

「…」

「…？」

ハンターは悩んでいた。

この少女は何者か？どこの人なのか？

どうして食事を求めているんだ？

最後の疑問は確かにわかる、自分もそうだからな。

ただなんで食に関してはあまり関わりがないこの村に…？

悩み悩み苦悩苦悩…

そこで頭に突き刺さり頭蓋骨を砕きそうな声が飛んでくる。

「食事を出してくれるのではないのか？」

理由としては大声ではなく至近距離からの耳元囁きボイスだ。

「うぉっ… わ、分かってるって…」

小さな悲鳴をあげながら、マイハウスのキッチンに向かう。

通常、マイハウスにキッチンは造られていないが、このハンターのこだわりで報酬金をはたいて作ってもらったらしい。

このハンター、自分が安心して食べられる物以外はほぼ食べないヤツなのだ。

「んーっと… 何にするかな…」

食材を入れている棚を開けてみる。

この中には氷結晶が大量に並べられており、ハンター曰く凍土や雪山の洞窟内では食物や痛みやすい物が長持ちするという考え方から、それを再現した保存庫である。凍りそうで凍らない適温を保っている

「ド定番… 焼いた肉… ケルビ肉にしようか…」

よっ… と、ケルビの生肉の小さめのブロックを取り出し、まな板の上に乗せる。

「…」

それを1センチ程の厚さに切っていく。

そして上からモガ村直産の塩をパラパラと振っていく。
「～♪…」
獄炎石を並べた上にフライパンを置いたエコなコンロにお肉を入れていく。
瞬間、白い湯気が上がり、肉の焼ける香りが部屋中に広がる。
「…!?」
ベッドでごろごろしていた恐暴竜もその香りに引き込まれる。
「っとと、これも入れなきゃ…」
手に取ったのは酒、深い上品な香りの酒をフライパンの中に少し入れる。
また湯気が上がり、また別の香りが舞い上がる。
すぐに蓋を被せ、香りを肉に閉じ込める。
「…ぉー…」
壁の裏で貪食の王がキラキラした目でこちらを覗いている。
今のうちに皿やらを用意しておこう。
手元の引き出しから布に包まれたフォークとナイフを取り出し、ベッドがある部屋のテーブルに置く。
「そろそろなのか…!?」
獣のような視線を送ってくる。
「もう少し待っててな…？」
キッチンに戻ると、フライパンの蓋を開けお肉を皿に盛り付けていく。
「ほら、出来たぞ？」
「おぉー…美味しそう…♪」
直で焼いた肉に手を伸ばしている彼女に
「おっと、ちょいと待ちな…こいつはこうやって食うんだ…」
そういうと、フォークとナイフを使い、肉を刺しながら切り分ける。
「ほら、口開けな…？」
「ん…ぁーん…♪」

彼女の舌に乗せてあげると、彼女はお肉を歯で押さえながら、フォークから引き抜き咀嚼する。
「…」
「… どうだ… ？」
沈黙が走る。
「… 口に… 合わなかったか… ？」
「… しぃ」
「… ？」
「とっ…… ってもおいしい！」
パァっと笑顔を向けてくる。
「そか… そりゃよかった…」
ついついその無邪気さ故か、頭を撫でてしまう。
「… ？」
「… はっ… !?」
しまった、と内心焦っている。
「いやぁ!?なんでもないよ?ちょっとした茶目っ気って奴… ！」
「… 何を言ってるんだい… ？」
よくわからない謎な少女に苦笑いされた。
「… はぁ…」

「何事なんだろう… 今って…」

その後、２人で仲良く食事をしたようです。

恐暴竜の生態を確認せよ！

…Ｉｎ　ｍｙ　ｈｏｕｓｅ

「…　ふわぁ…」

目の前で欠伸をかいている少女。

腑抜けているというか幼いというか、そんな顔とは全く正反対なバンギス装備。

「全てが謎だ…」

「ふぇ？」

おっと、心の声が漏れていたようだ。

しかし本当に疑問が尽きない。

そろそろコヤツの活動を観察しようと思う。変態じゃないぞ？

「眠くなってきちゃった…　おやすみ…　♪」

眠気を感じたか、私のベッドに飛び乗っては丸くなって眠り始めた。

「世話の掛かるヤツだな…」

彼女の食べた後の皿を片付けながらそう呟いた。

しかし彼女が食べた後の皿の上はとても綺麗だ。

残した物が何も無いのである。

肉の一欠片も、トッピングされた食材のほんの一部も残っていない。

余程お腹がすいているのか、それとも礼儀正しい奴なのか…

まぁ、どちらにせよ食材を大切にする事は大切だ、これは賞賛するに値するな。

「良い奴ではありそうだ、しかし人のベッドをなんの躊躇いもなく使うとは…」

片付け終えると、彼女の眠るベッドの端に腰掛ける。

仄かに香る彼女の香り。

優しい香りだった。

引き込まれ、入り込んだら二度と出られない迷宮のような恐さすら備えている。

その矛盾する2つの比喩表現から導き出されるのは、とても可愛いと言うことだ。
「・・・ 野良猫を世話したがるみたいな気持ちかな・・・ きっとそうだな・・・」
1人でボソボソと呟いていると、彼女は少し反応した。
身体をピクリと動かすと、ころんとこちらに転がってくるではないか。
「んーっ・・・ ん♪」
私の毛布が気に入ったか、それを抱き締めながら眠っているようだ。
「はは・・・ くれてやるよ・・・」
彼女に手を伸ばし、髪に触れ、そのまま撫でてあげた。

激痛を伴いながら。

「んーっ・・・ !硬いお肉・・・」
「いっ・・・ !?ちょちょ・・・ 食うなって・・・ !」
痛いけど起こしちゃいけな気もしながら、静かな声で喚く。
なんとか手を引き抜くことが出来た。
やれやれ、唾液でベトベトだな・・・
手には赤く歯型・・・
ハンターは新たな事実に気づいた。
・・・ 歯型・・・ なのか・・・ ?
手の甲に並んでいる赤い跡は、到底普通の歯とは思えない形の跡だった。
表現するのであればサメのような、しかし鋭利ではなく、ナイフと言うよりは斧のような感じの、そんな牙の跡だった。
それが扇状に並んでいる。
「ど、どうなってんだ・・・ ?」
彼女に視線を向けた。
「・・・ ♪」

人が痛みに悶えているなか、極上の夢を楽しんでいた。
「・・・ はぁ、本当に憎めん顔をしているな・・・」
私も一緒にベッドに入る事にした。
髪を結っている紐を解き、髪がはらりと結う前の形に戻る。
装備を置き、楽な格好でベッドに潜り込むと、大部分をこの少女に取られていた。
「く・・・ 狭いな・・・」
彼女に触れるスレスレを保っていたが、このままでは一生寝付けない気がしたので、諦めて・・・
「んしょ・・・」
彼女の膝下と背に手を回して、ベッドの向きに寝せてやった。
隣に彼女と平行に並んで天井を見つめる。
そして、その視線は少女に向いていく。
「風邪引くぞ・・・」
毛布を彼女にかけてやった。
彼女は幸せそうに、心地よさそうに頬を毛布にくっつけている。
全く、本当に最後まで何だか分からないヤツだな・・・
最後には、自分より一回りほど小さな少女を優しく包むように抱き締め、夢へと堕ちていった。

行くぞ孤島！孤独な島！

さてさて、今私はマイハウスに鎮座している。
何故かこの娘も鎮座している。
この娘は急にウチらが食っている飯を食いたいと言い出した。
して食わせた。まぁまだ良いだろう。
あれ？

「私のナチュラルなフードたちはどこへ・・・？」

そうだそうだ、私はめちゃくちゃ美味いサバイバルな飯が食いたいのだ。
「んー・・・ おい嬢ちゃん・・・ 孤島って知ってるか？」
「ことー？」
この反応、どうやら孤島というエリアを知らないようだな・・・ 結構有名な島らしいが・・・
「ああ、その孤島の奥深くには美味な食材が隠れているらしいんだ・・・」
「美味!?食材!?」
嬉しそうにぴょんぴょん跳ねている。
「おいおいちょっと待った、少し考えてくれ、私はお前さんに飯を作った、ここまでいいな？」
「う、うん！」
「なら私だって食わされても、最低でも食材の提供くらいされてもいいと思わないか？」
「・・・」
そこで少女は沈黙する。
巻いたゼンマイが切れた絡繰り仕掛けの人形みたいに。
「・・・ 私に頼むの・・・？」
「その通りだが・・・ おかしいか？」
なんてこった、この野郎め自分だけ食って帰ろうとしていやがっ

た・・・ まぁよい
「でだ、これから孤島に一緒に来て新鮮な食材を採りに行こうと思う！」
「・・・ 分かった、行くよ！」
お、結構あっさり来てくれるんだな、安心安心・・・
「そのかわり、また私にご飯作ってくれる・・・？」
っと言いながら、首を傾げて上目遣いで見つめてくる。反則だ。
「わかったよ・・・ じゃぁ、用意するぞ・・・」
―Ｎｏｗ Ｌｏａｄｉｎｇ・・・
―
―
―
ここはユクモ村から少し離れた広い平野だ。
かなりの広さのその土地には、その広さを利用し飛行船が多く停る場所になっている。
「んーっと・・・ 私たちは孤島だから・・・ アレだな」
「わぁ・・・ おっきい・・・」
今回はモガの村が近くに位置する孤島へ向かう。
村がある事もあり、そこそこいい造りをした船に乗れるのだ。
「いい船でよかったな、火山とか船は酷いぞ」
「火山！たまに行くとこだ！」
たまに火山に行く？何を言っているんだこの娘・・・
「？まぁいい、取り敢えず乗り込むぞ」
「はぁい」
採取ツアーの紙を係の人に渡して、船に乗り込む。
「これから行く孤島はこんなとこらしい、持っとけ」
私は彼女に孤島のマップを渡した。
「もしなんかあったら私に構わず逃げていいからな？」
そして相手の頭を撫でた。
「ふわぁ・・・ ♪」
なんとも嬉しそうな表情でこっちを見ている。

かなり可愛い、正直言えば私は男性に興味をあまり持たない。
なんならコイツでも・・・　いや、落ち着け私、コイツがもし好きでも手を出しちゃいけないな・・・
私はこいつを守ってやらなきゃな・・・

「いつまで撫でてるのさぁ・・・」

かっさらえ！食材たちを！

さあさあ、孤島にやってきた。
天気は快晴、気温湿度共にいい感じだ。
「んっ…くぅ…いい空気だ。」
思いっきり息を吸ってみれば、身体の中身を全て入れ替えたような、強烈な爽快感が全身を駆け巡る。
「渓流以上に空気が綺麗なとこってのもあるもんなんだなぁ…」
「ふわぁ♪いい匂い♪」
我々は今ベースキャンプで地図を確認、そして計画を立てている。
「こっちに行った後こっちに…」
彼女は全くもって話を聞いていないようだ、全くもう…
「そんな事より食べ物だよぉ…お腹空いちゃった…」
…おいおい船の中で食ってたご飯はどこ行っちゃったんだよ…
「もうか？一体どんな消化器官を持ってんだ…」
そういって私は気がついた。
そういえば、バンギス装備ってのは素材主と同じくお腹が空きやすくなると聞た事がある。
そのせいでこうもお腹が空くのだろうか？
まぁ、そんな事なら尚更、早く出発した方が良さそうだ。
「まぁ、そろそろ出発だな、着いてこい！」
「はぁい」

Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ…

二人の少女の前には、十二分と言える自然の空気、十二分と言える

生命力が広がった。
「おぉ・・・ ベースキャンプからは想像できなかったな・・・ こんな風なのか・・・ なんか、凄いな・・・」
私は、海風に前髪を揺らしながら、その自然に驚嘆の声を漏らしている。
「ふわぁ・・・ 気持ちいい・・・ ♪」
この子も同様に自然を感じている様だ。
先ずはお腹を満たすとするか、彼女にはああ言ったものの、実は私も空腹を感じてきた。
「じゃぁまぁ・・・ 飯、食おうか・・・ 肉がいいなぁ」
背伸びをしながらそういえば、少女は食いつく。
「お肉！あの小さくて柔らかいのがいい！」
彼女は袖を引き、遠くに見えるケルビを指さす、よく見えたものだ。
「ケルビ、か・・・ いいけど、捕まえられるかな・・・ ？」
私は丘を越え、２頭のケルビを確認し、１匹にそっと寄っては一気に飛びつく。
「っ・・・ ぅぁ・・・ ！」
なんとも美しい曲線を空に描き、その獣は狩猟者の手を避ける。
「ちっ・・・ やっぱり早いな・・・」
無様な狩猟者の声と同時に、同種の獣の悲鳴が聞こえる。

・・・ ？

「・・・ ♪」
彼女が、ケルビを捕まえていた。
あの素早い獣を、上から跨るように押さえつけ、今にも食いついてしまう勢いで見つめている。
「おぉ・・・ よく捕まえたな・・・ ？」
「こんなの、少し睨んだら動かなくなっちゃうよ・・・ ！」
彼女は、その歯を獲物の喉に当てて・・・
「おいおい待て待て、締めるならこっちにしろ・・・」

と、私は彼女に小柄なナイフを差し出す。
彼女は容赦なくそれで首を掻っ切って、息の根を止めた。
「・・・ よし、それじゃぁ料理するか・・・」
締められたケルビを２人で運び、水の流れるエリアへと向かう

Ｎｏｗ Ｌｏａｄｉｎｇ・・・

「・・・ ほわぁ・・・ ♪」
「おぉ・・・ 凄いな・・・」

今回の料理は豪快に石焼きだ。

油を敷かずとも、ケルビ肉の脂が溶けだし、いい具合に焼けている。

「・・・ ♡ ・・・ ♡」
ジューシーな見た目だが、見た目だけではないだろう。
持ってきたスパイスの香りがより一層肉を引き立て、ほのかに香る海の香りが仕上げにかかる。
これぞ、私が求めていた食事だ。
「・・・ はぅぅ・・・ ♪」
だんだん我慢ができなくなっているな・・・

お預けにするのは酷だ、もう食べてしまおう。十分に火は通っているだろうしな。

薪を下ろして火力を下げて、仕上げに余熱でしばらく焼けば出来上がりだ。

「ふむ…　上手くできたな…　！」
早速木製のお皿2枚に盛り付ける。
もちろんお肉だけではなく、島の野菜なんかも入っている。
じゃぁ…　感謝を込めて…
「いただきます…　！」

先ずはもうお肉だ、ナイフとフォークで切り分けよう…　ん？
「くっ…　んんー…　!!」

あの子が苦戦しているな…　切り分けてやるか…　？
いや、自分で切ってこそステーキだな…　教えてやろう…

「ここをこうやって押さえるんだ…　そしてこっちで…　こう…」
「わぁ、凄い！できたぁ！」
なんとも無邪気な…　この世の中じゃ珍しいな…
全く装備に似合わんが。
「ささ、熱いうちに食え…」
「…　ぁー…　っ♡」
大きくひとくち…
「…　ぅん！美味しいよっ…　！」
「…　どれどれ…　っ…」
ふむ、こりゃ美味い。
外で作って食うのもあるが、これは美味いなぁ…
「…」
おや、彼女の手が止まっている、何かあったのだろうか。
既に肉は消滅しているが、更には野菜が残っている。
そういうことか…
「おい、お肉だけじゃダメだ、バランスよく食べなきゃ…」
「うぇ…　だって草だもん…　生肉とお揃いさんだもん…」
うじうじと…　自分勝手じゃ不健康だぞっ…

フォークに野菜を刺し、彼女の背に手を当てて…
「さぁ口を開けろ、こういうもんも食わないといけないんだ…」
彼女の柔らかな唇に押し付ける。
「むぐぅ?!… むぐぅー…」
なんとしても食わないのか… ならしょうがない…
私は押さえていた手で彼女の脇腹を擽った。
「ふひゃ!?あはははっ!やめてよぉ!」
スキあり…
危険のない速度で音もなく、隙だらけの口にフォークを入れる。
「!…」
その口は閉じられ、僅かに空いた隙間からはフォークのみが出される。
野菜はお口の中だ。
「う… っ… うぅぅ…」
苦虫を噛み潰したような顔とは、まさにこんな感じだろう。ニガ虫ではないが。
まぁ、あんまりだし、これをやろう。
「ほら、生えてた果実だ、口直しに食っとけ。」
そう言って、彼女に野いちごを渡した。
しかし… まぁ…
食べさせてあげると、どうも母性的な本能を感じるな。
可愛く見えてくるもんだ…
そう考えながら私は、野いちごを美味しそうに貪る彼女を見つめている。
… 可愛いな…

帰還、孤独に。

さて、かなりゆっくりした、お腹も満たされた。

「おい、そろそろ帰るぞ?日が暮れちゃうからな。」

私は果実を齧っている彼女に話しかけた。

筈だった。

何処にも彼女の姿がない、音も匂いも残っていない。

「・・・?・・・おい、何処に隠れてるんだ?。」

・・・

返答はない。

「・・・わ、私はあの集合場所にいるからな・・・!」

そう言いながら、来た時に決めていた集合場所に向かった。

ここで待っていれば必ずやって来るはずだ・・・

――数時間経過

一向に彼女は現れない。

心臓の音が身体中を埋める。

私が目を離したから・・・?

彼女は何処へ消えたのか・・・?

彼女は・・・生きているのか・・・?

自分を責めたい気分でいっぱいだった。

どんなにどんなに残りたくても、あと数分で船は出てしまう。
そして、ツアーの契約書には書いてあるのだ。
「如何なる理由があれども、時間内に飛行船に戻ること。」
置いて行かれれば、十中八九命は助からない。
何も無い中、夜明けまでこの島で過ごすことは恐らく不可能だ。
昼には見られないほどのモンスターが動き出し、島への侵入者は万全の準備が無ければ彼らの餌になる。
そんな中にあの子を置いていくなんて、とても考えたくは無かった。
彼女が居なくなってから7時間ほど経過した、昼に来たのでもう既に夜の帳が下りている。
あと数分、それしか時間が無い。
私は迷わず、孤島の中に走っていった。
「くっ・・・ どこだ・・・ !」
大声を上げて探す訳にもいかない、モンスターを呼び寄せるという恐ろしい結果に繋がるからだ。
極限の消音をしながら、島中を探し回った。
しかし、私はあまり発見したくない物を見つけてしまった。
「これ・・・ は・・・ うぐ・・・」
そこにあったのは小型モンスターの死骸だった。
首はひしゃげ、腹は開かれ、足はもげていた。
腐り始めているのだろう、辺りには腐臭が漂っていた。
傷口から見て、かなりの力を持ったモンスターにやられたものだろ

う。
この場所はまずい…
そう思った刹那…
私の身体は言う事を聞かなくなった。
「…っ…!?」
身体に流れる強烈な電流、痺れ。
この島に巣食う、海の竜ラギアクルスだ。
振り向いたその時には、既に電気の玉が飛ばされ、私はその場に仰向けに倒れている。
逃げ出さなくては、そう思ったが、指先すらまともに動かない。
私はそっと、自分の人生の終わりを悟った。
先程走ったせいか、興奮して頭があまり回らない。
錯乱した意識の中、こちらに寄るラギアクルスに目をやれば…
映ったのは、ラギアクルスの姿だけでは無かった。
口は裂け、背中の筋肉は隆起し、獰猛なオーラが溢れた…
恐暴竜、イビルジョー。
ここの生態系の頂点だろうか。
薄れゆく意識の中で…
ラギアクルスの倒れる音と、あの子の優しい声が、そっと耳に入った気がした。

さよなら？

森の中で目覚めた。

周りには誰もいない。

モンスターも、あの子も。

体はまだ、思い通りに動いてはくれないが、意識ははっきりしている。

（あの子は…　何処に…）

「おい…　居ないか…？」

返事はなく、ただ草木の揺れる音が聞こえてくるばかりである。

「何処…　いっちまったんだ…」

だんだんと心配は、重い不安に変わっていく。

私は一人、彼女は？モンスターは？彼女は？

彼女は？彼女は？彼女は？…

それから数十分、動けぬ体をゆっくり回復させながら、彼女のことを考えていた。

そこで私は嫌でも気づかされた。

私は彼女が好きなのだ。

思えば、私はあんまり人との付き合いが良いわけでもなく、一人で行動することが多かったからか、あまり人と話したことがない。

そんな私が一番頻繁に会話したのが彼女だからだろうか？

…　いや、今はそんなことを考えている場合ではないな…

「ここから…　抜け出さないと…」

軋む身体をゆっくりと起こし、鉛のような身体を引きながら森を抜けた。

森の外は彼女が居た地獄の様な風景とは一変、寧ろ嘲笑うかのように清々しい風景だった。

その何も無かったかのような風景は、逆に彼女の崩れそうな心を揺らした。

跡形もなく消えてしまった彼女を考えていた頭は混乱を始め、身体は発熱を始めた。

そんな中でも身体は治癒が進み、普段通りとは行かないが動けるようにはなった。

「探しに…　行かなきゃ…」

武器を持ち直し、ゆっくりと森に入った、

モンスター達に刺激を与えないよう、気配を消し物陰に潜みながら進んでいく。

しかし彼女は、今この状況で最も見たくない物を瞳に映すことになる。

帽子。

どこかのハンターが落としたものでは無いだろう。

緑に赤のラインが入ったバンギスXシリーズの頭装備だ。

あの子がつけていたものと同じ…　帽子…

瞳に映ったものはそれだけではない。

同じく緑と赤のラインが入った獣竜種。

恐暴竜、イビルジョー。

上位個体などでは無い、間違いなくG級、それでもトップクラスの部類だろう。

本来ここにいるべきではない、余りにも強大なモンスターだ。

確実な死は相手の瞳にも映っているかもしれないが、私には1つの切り札も残っていた。

切り札を相手の目の前に投げつけ、一気に相手に向かって走った。

相手を映すはずの目は閉じて。

閃光玉、強力な光を発する虫を加工して作られたアイテム、その強

烈な閃光は…

「一時的だけど… 視界を奪える… !」

奴の足元に落ちる帽子を拾いながら、物陰を縫うようにエリアを抜け出した。

「はぁっ… はぁっ!」

元々少なかった体力を限界まで使い切って、何とか帰りの船が着く場所まで辿り着いた。

「う… こんな… の… 落として…」

止まらない震えと涙、そして帽子を持ったまま。

さよなら？

彼女が私の前からいなくなって数日
何とか気を保つ為、生活を保つ為私は多くの依頼をがむしゃらにこなしていた。
けれど彼女を忘れ去ることはできず、もがけばもがくほど彼女を思い出してしまう。

「今日は・・・ こっち・・・ 孤島・・・ か・・・ ？」

こなす依頼の目的地はあの孤島、再びあの孤島に行く依頼が入っていた。
その依頼が書かれた紙から目線を外せず、取り憑かれたように見つめている。

「孤島に依頼なんて珍しいな・・・ 内容は・・・ ？」

彼女のことを考えずにはいられず、行方不明車の捜索かなにかではないか、と淡い希望を抱いて依頼書の内容に目を通す。

【孤島に生息するモンスターの生態系調査】
” 近頃孤島のモンスターの様子がおかしい。小型モンスターはめっきり姿を見せないようになり、大型モンスターの数も減少しているように感じられる。実際に向かって調査を依頼したい。”
との事だった。
少し気を落とすも、そこそこ多い報酬金は魅力的であり、内容も調査のみで極端に難しい訳では無い為受けない手は無いと判断し、依頼を受注に向かう。
それとも彼女に再び会いたいという気持ちからやけになってしまっているのかもしれない。

「これ、受注を。」
「かしこまりました、お気をつけて。狩人さんにご武運を。」
支度を終え、クエストカウンターからの言葉も貰った所で早速目的地へと向かった。

Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ…

孤島、ここはいつも変わらず仄かに潮の香りがする。
今回の依頼はモンスターの生態調査。ターゲットはモンスターの痕跡を調査し、予測の為のサンプルを手に入れること。
「来てはみたが…　噂通りモンスターが少ない…　？」
ある程度歩き、いつもは大型草食獣や小型肉食獣が徘徊しているエリアを見てもポツポツと居るだけであまり賑やかでない様子が見て取れる。
これ程までに分かりやすく変化するとはただ事では無い。と直感的に悟る。
「なんでだろう？疫病とかでは無いといいんだけど…」
ゆっくりと観察を進めながら島の奥地へと向かっていく、モンスターが少ない為か調査はスムーズに進んでいく。

「ここまで顕著に変化するなんて…　一体どんな…」

ジャギィ達が蔓延るエリアにも静寂が広がり、虫の羽音や鳥の鳴き声だけが響いている。
余りの静寂に動揺を隠せず、少々臆しながらも観察を続ける。と、彼女の足に何かが引っかかった。

「？…　なにか落ちて…」

そこには何かの血痕が染み付き、ところどころ折れている大型モンスターの骨が散らばっている。
余程の怪力を持ったモンスターでもいるのだろうか？頭蓋骨と思われる骨には深深と牙の後が刻まれている。

「…　っ…　ここは危ない、早く戻ろう…」

骨になってはいるが、自身がいた日からそう長くは経っていないこと、肉片の腐り具合を見ても古すぎるものでは無いことから、付近にはいなくとも、大型のモンスターがこの島に居座っている可能性があるためだ。
ゆっくりと、しかし最大限警戒しながら来た道を辿り、ベースキャンプへと向かう。
その時、背後からなにかゾワッとする、殺意の塊のような気配を感じる。

「っ…　！」

余りにも直接的に感じるオーラに、身体が強ばってしまう。
確かにそこにある、今そこにある恐怖を感じながらも身体は言うことを聞かない。
こちらに気づいていないことを祈りながら、確実に、1歩1歩歩い

ていく。

「っ・・・　はぁっ・・・　はぁ・・・」

どれほど歩いただろうか？と言っても来た道を戻っただけ、たいした距離では無かったがまるで永遠のように長く感じていたようだ。

早く帰らないと・・・　そう思っていたところだった。

「まってー！おねーさん！」

恐怖で頭がおかしくなったか、奇妙な鳴き声の鳥だろうか？

あの子の声が聞こえた。